大津市上田上牧地区における民具調査について（中間報告）

須藤　護・蔭山　歩

(1) 田上プロジェクトの目的

このプロジェクトは「里山ORC研究班2」によって企画されたもので、以下に示すように複数の目的が複合的に織り込まれている。

1、「里山ORC研究班2」の研究課題のうち、地域の生活を具体的に追うことによって、生活史、および生活文化の面での研究に厚みを加えていく。

2、民俗文化の研究は幅広い分野でおこなわれている。その中で、女性が果たしてきた役割は大きかったにもかかわらず、女性の生活を中心に据えた研究は多くない。今回は田上地区において、女性を中心とした生活史、生活文化を取り上げる。

3、生活の中で女性が主に担ってきたものは「衣」と「食」の分野が中心になるように思う。そのうち「衣」の分野の研究者は少なく、豊富な資料が残存しているにもかかわらず、資料の活用が十分に行われていない。

4、田上地区では「絣と手ぬぐい」が日常生活や生産活動において欠かせない存在であった。それは実用的であったことはもちろんであるが、造形的にも非常に優れており、生活の中から生まれた造形を代表するものといっても過言ではない。この「絣と手ぬぐい」をメインのテーマとして、その背後に存在する田畑や山での仕事、冠婚葬祭、地域内での付き合い、他地域との交流などを具体的に追っていく。

5、以上の研究成果を広く学生および一般市民に展示公開し、地域に蓄積されてきた文化の厚みを再認識する機会を作るとともに、人々の創意工夫によって物や道具が大切に扱われてきたことを、豊かな時代に育った若い人々に伝えていく。またこの成果を2008年度後期の国際文化学部の正規授業に生かすことを検討中である。

(2) 調査項目と内容

1、絣と手ぬぐいにみる技術と民俗

日常生活や冠婚葬祭の際に使われてきた絣および縞、手ぬぐいに関する由来、製作方法、製作技術について、田上地区の事例を中心に問題を深めていく。その過程で使用されてきた道具類を調査し、記録にとどめる。

(1) 綿の栽培（種まきから収穫まで、畑の活用方法を含む）
(2) 糸をとる・糸を染める・機を織る
(3) 手ぬぐいを作る
(4) 綿の栽培用具、糸をとる道具、織る道具、保存・管理の道具等の民具台帳の作成
(5) 田上で使われてきた「絣・縞・手ぬぐい」の標本つくり

2、暮らしの中の絣と手ぬぐい

田上の女性たちの手で守られてきた絣・縞、手ぬぐいが、日常生活の中でどのように使われてきたか、また管理されてきたか具体的に探っていく。

(1) 田上の1年（生産暦を作成し田上の人々の1年間の生活サイクルを具体化する）
(2) 生産暦の中でハレとケ、四季の移り変わり、作業の内容などをとおして、絣と手ぬぐいが多様に使い分けられていたことを明らかにする
(3) 女性を中心とした農作業等、その際に使用されてきた道具類の台帳作成

3、女の一生

主に聞き書きにより、今日まで田上の女性たちが歩んできた道を記録にとどめる。その中で、家族の衣生活と食生活を管理してきた女性たちが果たしてきた役割を探る。

(1) 娘時代のこと
　裁縫を覚える
　茶摘み、田植え、繊維工場などへの出稼ぎ
(2) 嫁入り、出産、子供の世話
　嫁入り支度（衣装、布団、そのほかの嫁入り道具）
　嫁入り後の婚家との付き合い

（3）　嫁から世帯主の妻へ（杓子渡し）
　　一家の切り盛り
（4）　年を重ねて
　　老後の女の役割など

（3）民具調査について

1、民具調査の概要
（1）調査地：滋賀県大津市牧町　真光寺（東郷正文住職）
（2）調査内容：民具台帳作成
（3）作業内容：民具実測→聞き取り→民具写真撮影→民具台帳作成

2、民具調査状況（2008年2月30日現在）
（1）実施期間：2007年4月～2008年2月　23日間（合宿3回含む）
（2）参加者：　のべ103名
（3）調査民具数：機織道具類62点、竹カゴ類32点、藁細工類11点、
　　衣類・布類74点　手拭31点　合計210点
（4）聞き取り者：9名
（5）調査コアメンバー：6名
　須藤　護（里山ORC研究スタッフ、国際文化学部教授）
　豊田　悠（国際文化学部4回）
　田邊真未（国際文化学部4回）
　櫻井　想（佛教大学3回）
　越田純市（佛教大学3回）
　蔭山　歩（里山ORCリサーチアシスタント）

3、調査実施記録（2007～2008年）
(1) 4月16日（月）　聞き取り調査：東郷正文さん
(2) 6月5日（火）　聞き取り調査：東郷正文さん
(3) 6月18日（月）　民具調査：竹カゴ・藁細工類　聞き取り調査：東郷正文さん
(4) 6月22日（金）　聞き取り調査：牧町奥田しめさん、奥田さん家族　3名
(5) 7月18日（水）　聞き取り調査：牧町古家静江さん、山本春枝さん　2名

(6) 8月24日（金）～26日（日）現地調査合宿　第1回

民具実測調査（織り・染め）・聞き取り調査：東郷正文さん

(7) 10月5日（金）　桐生地区フィールド調査：上田上桐生観光協会、冬青工房

(8) 10月24日（水）～26日（金）現地調査合宿　第2回

民具実測調査（織り・染め）・聞き取り調査：東郷正文さん

(9) 11月3日（土）　聞き取り調査：上田上市民センター（上田上文化祭）、奥田しめさん

(10) 11月12日（月）　民具調査まとめ作業、発表準備ミーティング

(11) 11月17日（土）　国際文化学部コアセミナーにて民具調査について中間発表

タイトル：「モノが語る生活の歴史　大津市上田上牧地区・郷土史料館の資料整理から」

発表者：須藤、豊田、田邊、越田、蔭山

(12) 11月20日（火）　展覧会・図録に関するミーティング

(13) 12月20日（木）　民具調査まとめ作業、展覧会・図録に関するミーティング

(14) 1月13日（日）　展覧会・図録に関するミーティング、田上手拭撮影作業

(15) 2月1日（金）～3日（日）　現地調査合宿　第3回

民具撮影作業・聞き取り調査：東郷正文さん、古家静江さん

写真技術指導：坪口裕亮（写真家・京都造形大学非常勤講師）

(16) 2月9日（土）　資料・文献調査：竹カゴ・藁細工類

(17) 2月12日（火）　展覧会・図録に関するミーティング・編集作業

(18) 2月19日（火）　聞き取り調査：琵琶湖博物館　中藤容子さん

(19) 2月20日（水）　展覧会・図録に関するミーティング・聞き取り調査：奥田しめさん

(20) 2月27日（水）　聞き取り調査：琵琶湖博物館　中藤容子さん、辻川智代さん

（4）今後の活動

1、2008年3月～4月

調査資料の総合的なまとめ、原稿化。展示計画の作成、展示パネル（展示説明、民具図面、写真パネル）の作成など。

2、2008年5月に展覧会開催。

3、地域との共同作業について

里山ORCのプロジェクトがはじまって4年を経過しようとしているが、市街地化・脱農村化された瀬田キャンパスの周辺に、これほど多くの民俗事象が残っていることに驚きの目を見張るとともに、地域の人々が自らの手によって生活文化を伝承し、記録にとどめてきたことに敬意を表したい。この計画が実現した大きな要因は、地域の人々が地道に積み重ねてきた記録作成、手作り民俗資料館の実現等の実績があったからであり、その上に里山ORCの研究が位置づけられている。このプロジェクトが目指している「地域との共生」を進めていく上で、以上の計画がモデル事業の一つになることを望みたい。

(5) 学生スタッフレポート－里山ORCのプロジェクトに参加して－

「民具調査に参加して」

龍谷大学国際文化学部4年　豊田　悠

今回の民具調査はとても充実したものだった。調査では何度か合宿を行ったが、これは非常に良かった。主な内容は、地域の人々への聞き取り調査や実測図の作成、ミーティングなどだ。特に実測図の作成は難しく根気の要る作業だったが、図を書き上げた時には、そのモノの名前や特徴、用途や作成者など、あらゆる知識が自然と頭に刻み込まれていた。ここでは、改めて知識を得るという意味を知った。教科書では決して習う事が出来ない知識。この合宿内では、常にそのような知識が飛び交う機会があった。たとえば今回調査した中に、機織り機に用いるオサという道具がある。当初は名前も解らない道具だったが、聞き取り調査や実測によって、業者が売りに来た・家庭内で伝達されてきた・村にオサを織る名人がいたなど、様々な事が解った。このようにモノに触れる事やモノを観察するという事は、自然とそのモノの歴史を知る事に繋がるのかもしれない。また自身に対して言える事だが、知識不足を感じたゆえ、これから調査をする際には事前にもっとモノについて調べる必要がある。そして、知識がないからと人に頼るのではなく、自分で解決策を探す努力がより必要だと感じた。

今回の合宿で気になった点は、作業の遅さと優先順位だ。モノの実測をする際に、一つのモノを調べる時間が少し長い傾向があったと思う。また数ある民具の中でも、「このモノには時間がかかりそうだ」というモノを見つけるべきだろう。そうする事によって、後の作業がスムーズになり、より丁寧な調査が出来るのではないだろうか。

民具とは農民や庶民が使っていた日常道具である。そのため民具調査は専門知識を必要とせず、誰でも参加できるものだ。民具を知る事は、人の生活の歴史を知る事である。人がどうやって生きて来たのかという重みのある歴史が、民具にはぎゅっと詰まっている。なぜ民具調査をするのかと聞かれて、上手い言葉は浮かばない。しかし、調査内で出会う様々な人々との出会いや知識には、他では得る事ができない魅力があるように思う。

「民具調査レポート」

龍谷大学国際文化学部4年　田邊真未

今回、里山ORC上田上調査の民俗文化研究班にメンバーとして参加し、地域の人々の暮らしに生きる文化を直接学ぶ機会を持つことができた。大津市上田上牧地区にある郷土史料館の資料整理から活動を始めたが、実際に綿繰り機やオサなどの民具を観察し、計測・作図していく作業は初めての経験だったので、観察する力の難しさと重要性をとても感じた。細かく記録することで民具に対する疑問を見つけ出すことができ、次の段階である聞き取り調査で話を発展させられるということを身をもって体験することができた。牧に暮らす人々から聞き取った話と調査した民具が繋がった時は、調査が形になっていく過程が感じられ、とても嬉しかったことを覚えている。

また、牧の女性の生活に注目し、子どもの時から織物を中心に、生活の中で大切な役割を果たしてきた女性たちの一生を研究してきた。女性に焦点を置くと、牧の伝統的な作業着である三半前垂れや手拭いなど、生活の中で欠かせないモノ・事柄が女性たちの織物の技術によって支えられていたことがわかり、そのことによって牧の生活・文化を深く理解することができた。

こうした地域に入って調査するという経験を通し、自分の博物館学芸員課程で勉強してきたことをより具体的に発展させることができたのではないかと感じる。また、牧の人々の繋がりを見ていると、自分の生活を振り返り、多くのことを考える時間を持つ機会が増えた。このことも、大切な一つの発見である。

「龍谷大学　里山ORCに参加して」

佛教大学文学部人文学科3年　櫻井　想

昨年から本格的に参加している龍谷大学の里山ORC。私はこのプロジェクトで本当に沢山のことを学ばせていただいている。私が参加しているのは人文科学系の民俗班である。具体的な調査内容は、上田上の牧という地域に残されている民具（生活用具）を細かく見ることによって、この地域に住む人々の生活の歴史を見つめなおすという作業である。牧の真光寺にある田上郷土史料館には沢山の民具が保存されているため、今回のプロジェクトでは田上特有の田上手拭や絣や縞柄の作業着、そして、それにまつわる女性の仕事などに焦点をあてている。

滋賀県においては数多くの民俗報告書が出されている。しかしその多くは祭礼や、それに関わる村の組織などである。祭礼の際などは女人禁制が見られるため女性の果たした役割という点が軽視されがちであった。裏方で働く女性をしっかり見つめ直すことで滋賀県における庶民の本当の歴史をみようとしているのだと私は感じた。それは民具にも同様のことが言える。今回は絣や縞といった織物に関する民具調査が主であったが今まで私は織物についての知識が一切なく、はじめは全くわからない状態での調査であったが、どの民具が、どのような働きをするか地元の方々に話を伺いながら徐々にではあるがわかってくると実に面白くなってきた。実際に民具を使って作業の一つの工程をやってみると本に書かれていることがどれだけ難しいかが分かる。そして同時に、昔の人々の暮らしから現代の私達が学ばなければならないことが多いことに気付かされる。より良い生活にするために実に工夫を重ねた智恵と、そこから生まれる精神性に私はとても感動した。90代のおばあさんが住む家には130年前に織られたという長持ちかけが残されている。今で言うパッチワークなのだが実際は破れてきた沢山の箇所を補修して使っていたものだが今まで織られてきた縞や絣のパッチワークはたいへん美しい。とても物を大切に扱う精神がそこに息づいているようであった。使い捨ての商品ばかりの社会だが昔はすべてがリサイクルできたのだと改めて感じた。

挙げ出すとキリがないほど、多くのことを身をもって学ぶことが出来ているが、これは何と言っても田上郷土史料館がある真光寺の住職、東郷さんの協力のおかげであることを忘れてはならない。調査させていただいている民具もこの東郷さんが大変苦労して集めてくださったものであるし、地元の方々にお話を聞かせていただくのをとりもってく

ださっているのも東郷さんのおかげである。非常に恵まれた環境で調査・研究させていただいていることに常々感謝しなければならないと思う。

「里山ORCのプロジェクトに参加して」

佛教大学文学部人文学科3年　越田純市

私は民俗の研究班での研究活動を通じて、様々なことを学んだと思う。まず今回の活動を行うにあたって上田上牧の郷土史料館と真光寺の住職である東郷さんの存在が大きいように思う。普通調査を行う際には、フィールドの人たちとの関係作りというのが不可欠であるが、今回の調査の場合は東郷さんが話者との関係を取り持ってくれるという非常に恵まれた環境が用意されていると思う。さらに、本来なら家々に眠っているはずの民具を、すでに東郷さんによって、その多くが収集されているということも、私たち学生が勉強をするうえで感謝すべきことである。

また私の勝手な考えではあるが、須藤先生が自分で調査したほうが能率がいいにもかかわらず、私たちのようなきちんとした研究方法を知らない学生たちに先生がそのつど指導をおこなってくださり、私たちを育ててくれようとしてくれるのがわかり、感謝の気持ちで一杯である。私たちも一刻も早くその調査方法を学びとって、少しでも研究の役にたてればと思っている。

この里山プロジェクトを展示会や大学の講義の一環としておこなうというということを聞いているが、これらは非常にすばらしい試みだと思う。展覧会はお世話になった地元の人々にその成果を還元するものとして重要である。また講義は今回私たちがフィールドから学んだ様々なことを他の学生にとも分かち合う大事なものだと思う。

その内容でも特に勉強になったのが、民具を見るという姿勢である。前回の経過報告でも先生がお話ししてくださった、「モノが語るもの」を私たち以外の他の学生にどのようにうけとられるかということに興味がある。

(6) 謝辞

民具調査には、大津市上田上牧地区の方々、滋賀県立琵琶湖博物館、滋賀県立図書館

の方々にご協力いただきました。特に、牧町真光寺住職東郷正文氏には、真光寺を合宿所として使用させていただき、調査作業環境への配慮やお心遣い、また牧町での古老への聞き取り調査のコーディネートなど多大なるご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。





